

研究区分	教員特別研究推進（地域振興）
------	----------------

研 究 テーマ	アジア研究におけるオーラルヒストリーとエスノグラフィーの比較検討				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進
	研究協力者	所属・職名	国際関係学研究科・助教	氏名	吉田 航太
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	小針 進

講演題目
アジア研究におけるオーラルヒストリーとエスノグラフィーの可能性
研究の目的、成果及び今後の展望
小針はこれまで、オーラルヒストリーの手法を用い、日韓関係に深く関わった韓国要人の「語り」を題材にして、韓国研究を行ってきた。吉田は、エスノグラフィーの手法で、インドネシアにおける廃棄物処理の変動を事例に、技術と社会のダイナミズムを論じてきた。オーラルヒストリーとは、ある個人にその体験を口述してもらい、これを記録、分析する一連の作業の総称である。政治学、歴史学、社会学などで使われる。他方、エスノグラフィーとは、観察対象の生活に入り込み、生活環境や行動様式から情報を取得する調査方法で、その成果物の民族誌まで総称する場合もある。 2025 年度、小針はこれまでの科研費を原資に行ってきた康仁徳 元韓国統一部長官（1932 年生まれ）に対するオーラルヒストリーの記録は、出版化するための最終作業を行った。2019 年に科研費基盤研究 C 成果報告書『康仁徳オーラルヒストリー記録』として発行はしたが、出版物としての刊行の必要性を感じたからです。その結果、2025 年 10 月、東京・神田の同時代社より『康仁徳と対北朝鮮インテリジェンス：韓国知日派知識人のオーラルヒストリー』として、出版することができた。2 つの新聞（東京新聞 2025 年 12 月 20 日、毎日新聞 2026 年 1 月 17 日）の書評欄でも、「康氏が語る南北関係秘史は、第一級の資料だ」などと好意的に取り上げられた。さらに、次のオーラルヒストリーの対象者として、日韓両国の元外交官 2 名に対する交渉とその基礎資料の収集にも着手した。 他方、吉田は 2024 年度に行ったインドネシアでの現地調査（2024 年 8 月および 2025 年 3 月）のデータの分析（フィールドノートの整理・聞き取りデータの書き起こしなど）を行った。ジャカルタ首都特別州および東ジャワ州スラバヤ市におけるエビ養殖業で生計を立てる人々が主に暮らす地区に滞在し、養殖業についての詳細および養殖池の荒廃やマングローブ林植樹活動といった環境問題について参与観察調査も行った。環境問題に対して地域コミュニティがどのように人々を動員しているのかという観点から調査データの分析を行った。その分析からは、ジャカルタ地域では移住者が中心とした集落であり養殖池の所有者も別地域在住のためコミュニティではなく個人単位で様々な副業を行ったり環境 NGO と協力する一方で、東ジャワ州では池の所有者や養殖農民が同じ地区に在住していることもあり、コミュニティ単位でエビの病害予防や植樹活動を行っているという違いがあることが判明し、地域による人々の動員構造の差異が明らかとなった。 オーラルヒストリーは語りを通じて歴史を記録する手法であり、エスノグラフィーは文化の現場に入り込み、その構造を理解する手法である。2 つの研究課程を通じて再認識することは、語り手と参加者の「意味づけ」が鮮明となる手法がアジア研究では有効だという点だ。なぜならば、研究者の解釈よりも、当事者の視点を尊重する研究方法だからだ。オリエンタリズムに陥ってはならないのだ。